
自宅に帰ろう

鯰金団

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自宅に帰ろう

【Nコード】

N5030F

【作者名】

鰯金団

【あらすじ】

青年が目覚めると森の中、おまけに記憶が無い。青年を追う怪しい集団、青年はなぜ追われているのか!? 特撮紛いな作品。

その1

青年は逃げていた。

しかし、なぜ逃げているのか、なぜ、逃げなければならないのか、青年は解らなかった。

なぜなら、青年には記憶が無かったからだ。

彼が目を覚ました場所は森の中だった。

目が覚めた時、周りに人の気配は無かった。

だから青年は一人で森に入って道に迷ったんだと思っていた。

このままずっとここに居ても助けは来ないと思った青年は出口を探すため、

森を歩き始めた。

（どのくらい時間が経ったのだろうか？）青年はそんな事を思い始めた頃、人の気配を感じた。

その気配は、1人だけじゃなかった。少なくとも5、6人はいる。

青年は救助隊が自分を探していると思い安堵した、そして自分の存在を知らせる為に叫んだ。

その声が彼等に届いたのだろう、彼等は青年へと近づいて行く。

しかし、彼等が近づいて来るにつれて「安堵」が「恐怖」へと変わっていくのに青年は気がついた。

（急いで逃げるんだ）心がそう青年に訴えている。

彼等は青年の姿を視認した瞬間に表情が一変した。

その表情を見た青年は無意識のうちに走り出していた。

（奴等は人じゃない、早く彼らを振り切らないと殺される）そんな考えが脳裏に浮んで、脇目も振らず走った。

気がつくとも青年は森を抜け、小さな港町まで逃げていた。

青年を追って彼等もまた港町まで来ていた。

青年は休むために狭い丁字路に入り、そこにあったゴミ箱を背もたれにして今の状況を整理する事にした。

（なんで奴等はここまで必要以上に追いかけて来るんだ？俺は何かを見たのか？）そんなことを思った時、青年は何で森にいたのか、それ以前はどこで何をしていたのか、自分の名前がなんだったのか、自分にとって大切な事が思い出せない事に気がついた。

青年は自分の過去が思い出せない事に言い知れない恐怖を感じ、必死に過去の事を思い出そうとしていた。

青年は自分の記憶の事に気を取られ、丁字路に彼等が近づいている事に気付くのが遅れていた。

青年が彼らが近づいているのに気付いた時には彼等は丁字路に入っていた。

青年の入った所は日が当たらない所だったため彼等がすぐに気が付かなかったのが幸いした。

彼等は二人一組で青年を探していた。

青年はゴミ箱側の二人を何とかしようと思った。

ゴミ箱の中に入っているゴミ袋が目に入った青年は、立ち上がりゴミ袋を手に掴んでゴミ箱側の二人に目潰しとしてゴミ袋を思い切りぶつけた。

ゴミ袋をぶつけられた二人は倒れ、青年は開いた道を全速力で走った。

丁字路を抜けた瞬間、女の人の驚いた声が聞こえ振り向いた。

振り返ると、女の人が倒れていた。

青年は、女の人起こそうと考えたが残りの4人がこちらへ近づいていたので悪いと思いながら走って逃げようとした。

すると今度は女の人の驚きの声ではなく、悲鳴が聞こえて青年は振り向いた。

青年は自分の目を疑った。疑わずには入られなかったからだ。

人間の姿をしていた彼等が人から化物へと姿を変えていたからだ。化物へと姿を変えた彼等は倒れていた女の人を捕まえ青年に女の人
の怯えた顔を見せつけた。

青年は、逃げれば女を殺すという脅迫だと思い、どうにかして助けなければと思った。

（助けようと思って自分には化物と対等に戦える訳がない、ましてや化物6人を相手にするなんて勝てる要素が微塵もない）そう青年が悩んでいると、化物は女の人を捕まえている手に力を入れ始めた。

（考えている余裕なんかない、自分が彼女を巻き込んでしまったんだ、彼女を死なせる訳にはいけない。）青年はそう思って化物へと走り出していた。

化物は青年がこちらに向つてくると女の人を離し青年を捕まえようとした。

青年は化物が自分へと伸ばした手を掴んで女の人へ叫んだ。

「早く逃げるんだ！」彼女は半狂乱になりながらその場から逃げ出した。

青年は、自分も化物から急いで逃げる方法を考えていた。

しかし、それは無駄だとすぐに理解できた。

青年の周りを化物が取り囲んでいたからだ。

化物達は青年を今度こそ逃すまいと確実に間合いを詰めて来ている。その時、青年は自分の後ろにいる狼のような姿をした化物が強い殺気を放っている事に気がついた。

青年は後ろの敵の攻撃をかわす事が出来れば逃げ道が出来るそう考え、後ろにいる敵の方を振り返ろうとしたその時、それを察知した後ろの化物が青年に攻撃を仕掛けてきた。

化物の攻撃を避けようとしたその時、体はまったく別の動きをしていた。

後ろの化物が青年を攻撃しようとした瞬間、青年は無意識のうちに化物を蹴り飛ばしていたのだ。

飛ばされた化物を見た瞬間、他の化物達が一斉に襲い掛かってくる。青年は攻撃を避けるために、開いた隙間へと跳んだ。

受身を取り立ち上がろうとした時、一体の化物が青年の方へと飛び込んできた。

飛び込んでくる化物を前にした青年の心には追われていた時の恐怖がいつの間にか消え、今、化物達を倒さなければならないという使命感が生まれていた。

恐怖心の無くなった青年は飛び込んできた化物に向って回し蹴りを決め、それを食らった化物は爆発を起こし、消滅した。

それを見た4体の化物は青年に向って攻撃を開始した。

4体の化物を相手に、青年は次々と蹴りや突き技を出し化物達との戦いを繰り広げていた。

青年の技によって化物達は次々と倒されて、残りは蹴りで飛ばされた狼型の化物1体だけになっていた。

先に動いたのは化物の方だった。

化物は青年の周りを動き、青年を翻弄していった。

（倒した化物と動きが違う）青年はそう思い、化物を捕まえようとするが、あまりの速さに捕まえる事ができず、逆に攻撃を受け続けている。

青年がダメージを受け続けて地面に倒れてようとした瞬間、化物は止めを刺そうと青年の体に噛み付こうとして口を大きく開けて青年に近づいた。

それを待っていたかのように倒れそうになっていた青年は踏ん張り化物の口を掴みそのまま地面へと思い切り叩き付け、その勢いのまま化物の真上へと飛び上りかかと落としを決めた。

すると、狼型の化物は人の姿に戻り、青年の顔を見て微かに唇を動かし消えてしまった。

化物が消えた時、青年は頭の中に不思議なイメージが浮かび上がっているのを感じた。

頭の中に、顔の見えない4人の男女と顔の見える小学生くらいの女の子の姿が浮んで、青年はこの人達は自分の家族なんだと不思議とそう思っていた。

青年はどこにあるか分からない家に帰ることを目的とした。

そしてもう一つ、青年は自分の名前を思い出した。

「俺の名前は、みなせ こうた皆瀬 光太だ。」

青年はそう口にする^と海沿いを歩き出した。

その2前編 人助けしよう

記憶を失っていた俺が化物と戦い、思い出したものは二つ。

「皆瀬光太」と言う自分の名前と自分には家族が居るという事。

そして、思い出さなければならぬ事が二つ。

なぜ自分は森の中で倒れていて、化物に追われなければならないかったのか。

光太は自分の家族が住んでいる家を探す事を第一に考え旅をする事にした。

港町から記憶の中の家を探し始めて3日ほど経っていた。

何時、港町と同じように化物と戦う事になるか判らない為、まともな食事と睡眠を取る事が出来ず、光太の精神と体は限界に近づいていた。

丁度よく子供用の遊具のある公園を発見した光太はそのベンチで仮眠を取ることにした。

どれ程の時間が過ぎたのだろうか、公園の遊具で遊ぶ子供達の声が聞こえている。

光太はまだはつきりしていない意識の中で時計を見つけ、（まだ昼なのに、子供がいるって事は今日は土曜か日曜なのか）と思いながらまた、眠りに就こうとしていると、子供達の叫び声が聞こえてきた。

その叫び声の方へ視線をやると、蟻の化物が子供達を襲おうとしている。

光太は最初、自分を追って来たのかと思い身構えたが、化物の行動を見ているとどうやら別の化物を探しているらしい。

「出て来いサンプル！！！！ここにいる奴等皆殺しにするぞ！！！！」
化物が大声で叫んでいる。

いくら叫んでも相手が出てこないらしく、痺れを切らした化物は見せしめと言わんばかりに子供に襲い掛かろうと構えた。

本来なら逃げるといふ行動を取るのが一般的なのだろうが、光太にとってその行動は取れなかった。

光太は自分は化物と戦って勝てる力がある事を知っている。

過去に戦った相手の人数は6体だったが今は1体しかない。

自分の力ならあの化物を倒して子供達を助ける事が出来る、そう確信した光太は化物に襲い掛かった。

しかし、結果は光太の予想とは逆の結果となった。

化物に襲い掛かった光太を化物はいとも簡単にベンチまで光太をはね返したのだ。

「俺に攻撃を仕掛けるとはいいい度胸だ。」そう言いながら化物は光太の方へと歩いて来る。

光太は、ベンチに体をぶつけられまともに呼吸をする事が出来なかった。

子供達だけでも助けられると思った光太は「今のうちに逃げるんだ！！」と叫び子供達に逃げるように促す。

光太の声を聞いた子供達は恐怖で震えながらも何とか逃げる事が出来た。

不意を付かれた化物は激怒し「すぐ死ねると思うな。」と言うと光太の体を地面に叩きつけ始めた。

抵抗する術の無い光太は無理し過ぎたと思いながら意識が遠退いてしまった。

俺が公園に着いた時、蟻野郎が人を地面に叩きつけていた。

叩きつけられている人を助けるために俺は蟻野郎に攻撃を仕掛けた。辛うじてまだ生きている様だった。

俺の攻撃を受けて倒れた蟻野郎はやっと見つけたといった顔で「サンプルやっと出てきたか、仲間の敵を取らせて貰う。」

「サンプルを殺しちゃ駄目なんじゃないのか？」と俺が言うと蟻野郎は「お前の核さえ破壊しなければ問題はない」と言い返して攻撃してきやがる。

今まで倒して来た蟻と同じ攻撃しかしてこない為、目を瞑ってでも避ける事が出来る。

「ここで死に掛けてる人の為にもお前をさっさと倒さないといけな
いんで次で決める事にする。」俺はそう宣言すると蟻野郎は今まで
の蟻と同じように俺に向って突進してきた。

蟻野郎の突進を今まで同様避けると、俺は体を捻り力を込めた拳を
蟻野郎の腹に当てた。

蟻野郎はいつもと同じく煙の様に消えていった。

辺りに化物の気配が無いか確認して、俺は死に掛けている人に駆け
寄った。

俺はその人の顔を見て驚きを隠せなかった。

はぐれていた仲間だったからだ。

その2中編 話を聞こう

気がつくのと夕方だった。

体を動かそうにも体中痛くて動かす事が出来ない。

（俺何したんだっけ？）と気を失う前の事を思い出す。

（蟻の化物から子供を助けようとして返り討ちにあっただ。なんで俺生きてるんだろう？）

そう考えていると横から視線を感じる。

視線を感じる方向へ目を向けると、俺と同じ年くらいの男が俺を見ていた。

「動けるか？光太。」

（俺に向ってそう声をかけるこの男は誰なのだろう？何で俺の名前を知っているんだ？）

俺は怪しいこの男について考えていると

「お前、喋れないのか？」

男は俺に聞いてくる。

「喋れるよ。それよりも俺はあんたに会った事があるのか？」

男は驚いていた。

「おいおい、冗談は止めてくれよ。中学からの仲間だろ？」

どうやら俺はこの男と中学生から関係があるらしい。

「悪いけど、覚えているのは自分の名前と家族がいるって事だけなんだ。」

そう伝えると男は俺の顔をまじまじと見始めた。

俺が嘘をついてないと解ると「仕方ない、自己紹介といこう。」

村浩むらこう二つて言うんだ。」そう言っていた。

野のむ

それから夜になるまでこの男から公園に現れた蟻の化物の事を聞いた。

話の中で俺はこの男に助けられた事も知った。
夜になると体も動かせるようになり安心した。

俺を助けてくれた事には感謝しているけど、まだこの男を完全に信用出来なかったからだ。

「どれ位前の事を覚えてるんだ？」と男は俺に聞いてきた。

俺は目覚めてからの事を手短かに話した。

すると男は「森で気付いたって事は俺の居た場所とは全然違う所にいたんだな。」と言う。

「お前は、何所にいたんだ？」

俺が聞き返すと男は気がついた時の事を話始めた。

目が覚めた時俺は手術台の上で寝ていた。

肝試しをしていてその後で・・・。

そこで俺はすぐにヤッシーと光太の事を思い出して辺りを見回した。
でも二人はいなかったから別の所にいるんだと思って施設内を探す事にした。

不思議な事に施設を探しても誰にも出会う事がなかった。

施設は活きているのに人の気配がしなかったんだ。

それで俺は外に出て二人を探して旅をする事になった。

途中で蟻野郎と出会いそこで人では無い姿になる事に気がついた。

蟻野郎はその時からずっと俺を狙ってきやがる。

男の話を聞いて俺は疑問に思ったことを口にした。

「施設が活きているのに誰も居なかった事も気になるが、ヤッシーってのは外人か？」

そう聞くと男は「ヤッシーはあだ名だ。山田茂晴^{やまだしげはる}ってのが本名だ。」
と笑いながら説明してくれた。

さらに、仲間の事についても説明してくれた。

「俺、お前、ヤッシー、みよ、ようこの5人は中学から仲が良かったんだ。皆それぞれ友達もいたけどよく一緒に色々やったんで友達というよりも仲間って言った方がしっくりくるんだ。」

「みよとようこって女？」

俺がそう聞くと男はそうだと言って「みよっちが5人の中で一番お前との付き合いが長いんだよ。幼稚園からの付き合いだって言うてたかな。」と意味有り気に笑う。

「その女二人は俺たちと一緒に肝試しはしなかったのか？」

俺は疑問をぶつける。

「肝試しをしようって言った時間がかなり遅かったんだ。だから先に帰したんだよ。」

男は俺に説明してくれる。

男はそれから俺に仲間の事や俺自身の事について話をしてくれた。男の話す内容が嘘だと感じられないせいだろうか、何時しか話を聞いている内に男に対する疑いが少し和らいでいた事に気がついた。

その2後編 考えよう

川原で俺たちは野宿をしていた。

「光太いい加減おきろよ」と俺を起こそうとする声が聞こえる。

「後2時間は寝かせてくれ」俺はそう言ってまた眠りに就こうとする。

遠くで何かをすくう音が聞こえる。目が覚めたら朝食が出来てる事だろうと思った。

チャプチャプという水の音が俺の方に近づいている事に気づいていたが俺はとにかく眠りたかった。それだけ眠かったからだ。

突然耳に冷たい液体が入った。俺はビックリして飛び起きる。世界がグルグル回る、敵の攻撃か？そう思っただけで辺りを見回すと鍋を持った男が立っていた。

「おはようさん」俺はとりあえず朝の挨拶をする。

「すっかり目が覚めて何よりだ。一応教えておくが今はもうこんなにちはの時間だぞ」

この男、少々イラついていらっしやる。言い訳の一つでも言っておいた方が良さそうだ。

「悪いな、ずっと1人で何時襲われるか解らない状態だったから満足に寝れてなかったんだよ」

そういうと今回だけだぞと言って見逃してくれた。

昨日はこの男にずっと俺の事を聞いていた。

話の内容から察するに俺は人当たりの良い性格だったらしい。男の話で俺は家族との関係も悪いという訳じゃない事も解った。家に帰ってもいらない子認定されたらそれからどうすればいいか困ってしまう。

「ところでその鍋どうしたんだ？昨日はどっかから弁当を拾ってきたみたいだったけど」

「ゴミ捨て場に捨ててあったから拾ったぞ、穴も開いてないから特

に問題ない。さつさと飯食おうぜ」そう言っただけ飯を俺に渡す。遅いこの男。

飯を食べながら俺は「お前これからどうするんだ？」と聞く。

「この辺りに化物のアジトがあるみたいなんだ。だから俺はそれを潰す。お前は家に帰るんだよね？」

「ああ、お前の手伝いは出来ないぞ。蟻の化物に殺されかけくらいだから足手まといになる」俺はそう言っただけ男に協力しない事を伝える。

（そういえば人で無い姿になったって言ってたな。どういう意味だろう？）

後片付けをしている時に俺は思い切っただけ聞いてみる事にした。

「なあ、昨日聞きそびれた事があるんだが聞いていいか？」

「何だ？答えられることなら答えるぞ」

「人じゃないが・・・」

俺が言い終らないうちに男は突然走り出した。

走り出した男に追いつくと昨日の蟻の化物が集団で男の前に立ち塞がっていた。

「サンプルお前が殺してきた分身の敵討ちと核を貰いに来た」女のような声がそう言う。

声の主は他の蟻よりも大きく女王蟻といった感じだ。

「ようやくボスの登場か、俺もそろそろ縁を切りたかったんだ。相手してやる」

男は挑発する。それを聞いた蟻軍団が憤怒している姿を見ると俺の方を向き「今の逃げるんだ」と逃げるようにと言った。

「1人でこの数を相手にするのは無理なんじゃないか？」無意識に男の心配をしている自分に気がついた。

「あいつ等は何度も倒してきたのは俺だ。数で攻めて来ようと問題ない。お前がいるとお前が危険な目に遭う、だからあいつ等がお前を狙う前に逃げてくれ」

男は再度逃げるように言う。

「死ぬんじゃないぞ」俺はそう言って全力で逃げる事にした。

「逃げた奴がいるぞ。追いかけて殺してしまえ」

逃げる光太を雑魚蟻が見つけた女王蟻が命令する。

光太を追おうとする雑魚蟻の前に立ち「ここを通すわけにはいかない」そう言っただけは姿を変えて攻撃を仕掛ける。

正直、光太が素直に逃げてくれて良かった。あいつならどんなに不利な状況でも一緒に戦ってくれるような奴だから、記憶喪失様様だ。次々と襲い掛かってくる雑魚蟻と戦いながら考えていた。

昨日光太と会ったからの事。俺は光太に会えて嬉しかった、研究所で目が覚めた時本当に心配した。最悪の場合も考えていた。だから公園で見つけた時は本当に嬉しかった。でもアイツは記憶喪失になっただけで昔の事を覚えていなかった。おまけに俺の事をずっと敵じゃないかと疑っていた。

だから光太は俺が自己紹介してもずっと名前を呼ばなかった。それでも光太は俺の仲間だ。

アイツが俺の事疑っていてもそれは昔の事を忘れているからだ。俺は光太の記憶が戻る事を信じる、だからそのためにもアイツを今死なせちゃいけない。人じゃなくなった俺の代わりにこのままただの人として生きて欲しい。俺はそう思っている。

それにしても切が無い。このままじゃ数で押し切られそう。俺は一度体勢立て直すために後ろへと下がった。その時見た光景を俺は疑うしかなかった。

なぜなら最初にいた雑魚蟻の倍以上の数がそこにはいたのだから。

「ここまで逃げればとりあえず大丈夫だろう」

壁にもたれかかって呼吸を整える。

アイツは大丈夫だろうか？俺は心配していた。いや、大丈夫だ。アイツは俺よりも化物と戦って来たみたいだし俺が心配する必要なんか無い。どうせもう蟻軍団をやっつけているさ。そうだ、そうに決まってる。

「ダメだ」絶対大丈夫そう思い込もうとしてもこの心配は消えてくれない。

第一アイツは俺の敵かもしれない、あの蟻と一芝居打って俺を騙そうとしているのかもしれないじゃないか。アイツは敵なんだから心配しないでいい、そう思おうと思った。それでも胸の辺りがスツキリしてくれない。

「アイツの事なんか忘れて自分の家と家族を探しに行こう」口に出して目的を再確認する。

一休みできたしもうそろそろ行こう、そう思い俺はまた走ろうとする。

なぜか昨日からの事を思い出す。

（俺が気を失っている間アイツは俺のそばにいた。）

「アイツは俺の様子を探ってたただけだ」

（俺の事を心配していた）

「アイツは俺を心配するフリをしてただけだ」

（記憶を失う前の事を話してくれた）

「俺がアイツを攻撃できないようにするためだ」

アイツの事が心配でしょうがない。敵だと思っている奴の事をなんで心配しなきゃならない。

無性に腹が立つ。

（ずっと一人で何時襲われるか解らない状態だったから満足に寝れてなかったんだよ）

自分で言った事を思い出す。

「簡単な事だったんだ。俺はアイツを敵だと思ってなかったんだ。だから話を聞いたんだ、安心して寝ている事が出来たんだ」

答えが出た。これからするべき事は一つ、アイツの所に行く。

アイツはまだ蟻軍団と戦っているはず、助けに行く。

俺は走ってきた道を戻る。

（少しでも早くアイツの所に戻らなきゃ俺は助けたい一心で走る。狼の化物と戦った時と同じように中から力が溢れ出てくるのを感じながら・・・）

戻るとアイツの姿は無かった。無いというより蟻の化物で見えないと言った方が正しいだろう。

「コウジーーーー！」俺は名前を叫びながら蟻の化物の中に突入した。中に入り蟻の化物と戦いながら浩二の名前を呼び続けていた。

化物の声に紛れて微かに声が聞こえた。

俺は微かに聞こえたその声の辺りにいた化物を必死に掻き分けた。

そこには蟻の化物と戦っている別の存在がいた。

浩二が言っていた人じゃない者ってこういう事だったのかと気がついた。

浩二は俺を見つけると開口一番に言った。

「来ちまったのか、どうなっても知らないぞ」それが再開した浩二が最初に言った言葉だった。

「どうなっても知らないってのはこの化物達の事を言ってるんだろ？」俺は軽口を叩く。

とても不思議な感じだ。狼の化物よりも数が多くて一度殺されかけた相手なのに全然恐怖を感じない。どんな奴等が相手でも2人なら勝てるそんな気さえしてくる。

俺達は襲い掛かってくる化物を片っ端から倒していった。

倒しても倒しても切がない。こいつ等はどこから沸いて出てくるんだろう。

その時、一瞬だった。女王蟻の腹部から雑魚蟻が出て来るのを見つけた。

「光太っ！」浩二が俺を呼ぶ。

俺は浩二と目が合うと浩二が何をしようとしているのか解った。

浩二が女王蟻まで行くための道を開くため俺は全力で雑魚蟻達を叩きのめす。

光太の作ってくれた道を通り俺は女王蟻の所まで行くことが出来た。

「お前の核を破壊する」俺はそう女王蟻に言うと同時に腹部に手を入れて核を取り出しすぐに破壊した。

核を破壊すると数え切れないほどの雑魚蟻が消えていった。

「助けに来てくれてありがとう。本当に助かったよ」俺は素直にお礼を言う。

「お礼を言われるような事はしてない。浩二だって俺を助けてくれたし、それに俺はお前に謝らないといけない事がある。ずっとお前の事、敵じゃないかって疑ってた。ご免」

疑ってたのは知っていたけど、それよりも俺を信じてくれて助けに来てくれた事がとても嬉しかった。

「疑いが晴れてよかったよ。」俺はそう伝えると蟻と戦う前に光太が何か聞こうとしている事を思い出した。

「お前、俺に何か聞こうとしてなかったか？」そう聞くと言い出しにくい様で困っている。

「もしかして聞こうとしてたのはこの姿の事か？」俺がそう言うと光太はそうだとうなずいた。

（まだ気づいてないのか？）今度は俺が逆に困ってしまう。

光太が敵に追われずにいるのならそのまま人としての生活をして欲しいと思っていたが、これはどうしたらいいだろう？

言うべきか言わないでおくべきか悩んでいると驚いたような声が聞こえた。

「どうした光太？」光太に聞くと「この手は何だ？俺の手じゃないっ！」と慌てふためいている。

やっと気づいたようでここって言わなければダメだと思った。

「光太、お前は俺と同じく人じゃない姿になる力を持ったんだ。お前が以前に狼の化物と戦う事が出来たのはその姿になる事が出来たからだと思う」

「じゃ、じゃあ俺は化物と同じ力を持っているって言うのか？」俺に問いかける。

「その通りだ」本当の事を伝える。

光太は突然の出来事に対応出来ずにいた。それでも俺ははつきりさせなきゃいけないと思ひ聞く。

「光太これから先はお前次第だ。化物として化物達と戦うか、人として人の生活を送るか」

「そんな事急に言われたって答えられない。今までの俺なら人の生活って言うだろうけどこのままだったらきつと家族も危険な目に遭う。でも今の俺は突然の事で冷静な判断が出来ない」

パニック状態になる光太に俺は言う。

「でも決心するなら今だ。今なら俺が蟻の化物を倒した事に出来る。ここで決心しないとお前の周りにいる人が化物に狙われるかもしれない。」

「明日の朝まで考えさせてくれ」それがこの日、光太の出した答えだった。

その3 前編 お世話になろう

浩二と別れて三日、俺は森の中にいた。

俺は浩二の二つの選択肢を選ばなかった。

俺が出した答えはく化物と戦いながら家まで帰る>

浩二は俺がその事を言うと思けた顔をしていた。

俺は浩二に自分の考えを伝える。

「今の俺には化物と戦う力を持っていてもそれを引き出す事が出来ていない。だからこのままお前と一緒に化物達を追っても俺は足手まといになる。俺は俺が記憶喪失になった理由も知りたい。家に帰る事で記憶喪失になった理由が解るかもしれない。我がままだけで自分の事を第一に考えたい」

「確かにお前の記憶が戻れば俺らをさらった奴らについて何か解るかもしれない。それに皆の事も気になる」

浩二は俺の考えを認めてくれた。

「ただとお前、姿を変える事が出来なかったら化物と対峙してもお前が死ぬだけだぞ?」

「その時は何とかなるさ。さっきも何とかなったんだし」

「昨日死にかけてた奴が言う事か?」

凶星を突かれた。

「参考になるかどうか判らないけど俺が姿を変える時の事を教えるよ」

「相手を倒すぞって思うと姿が変わるって言ってたけど全然変わらないな」

人目に付かない様に俺は森の中で練習をしていた。

「何か他に必要な事があるのかなあ？」

考えても答えは全くでない。

このままじゃずっと森の中だ。

俺は別の街に行く事に決めた。

俺の家の住所を浩二に教えてもらったからもう闇雲に探す必要も無くなった。

ただどこからどう行けば家に辿りつけるのか解らない。

「本屋で地図見るか」

本屋を探す事にしたその本屋も見つからない。

おまけに暑い、三日も森の中にいたから日差しがキツイ。

俺は屋根のあるバス停を見つけたのでそこで少し休む事にした。

顔に冷たい感触を感じて俺は飛び起きる。

「今の何だよ。雨か？」

外を見ても雨は降っていない。

「元気出た？」と後ろから女の声が聞こえて振り向く。

「どちらさん？」見たことも無い人がそこにいた。

「なんか負のオーラが漂ってたから元気づけようと思ったんだけどダメだった？」

どうやらこの人には俺が落ち込んでるように見えたらしい、実際落ち込みたくなる事だらけだが。

「元気が出る前に心臓が飛び出るかと思いましたよ。心配してくれありがとうございます」

心配してくれた事に関して一応お礼をする。

「いいのよ、それより君これから予定ある？無かったらお姉さんとご飯食べに行かない？」

今知り合ったばかりの人間を食事に誘おうとしているこの人の行動力に驚いた。

「誘ってくれるのは嬉しいのですが、お金持っていないんで・・・」

俺はお金を持っていなかったので断る。

「その事ならだいじょぶよ、お姉さんが奢ってあげるから。それじゃあすぐ行きましよう。さっさと行きましよう」

強引に謎のお姉さんに連れ去られてしまった。

入ったお店はラーメン屋さんだった。

「お姉さんの奢りよ。好きな物を頼みなさい。」

こんなにテンション高くて疲れないのだろうか？そう思いながら俺は食べる物を選ぶ。

「おじさん私巨大餃子とご飯大盛りね」

注文を聞いたおじさんは驚いていた。そんなに大きな餃子なのだろうか？

「君も早く頼みなさい」と急かす。

「俺は醤油ラーメンでお願いします」と注文すると横から、お姉さんが口を出す。

「食べ盛りなんだからチャーシューメンの大盛りになさい」とお姉さんが強引にメニューを決めてしまう。

大盛りなんて食べられるだろうか？

料理を待っている間お姉さんが質問してきた。

「君名前は？こちら辺に住んでるの？」

「俺の名前は皆瀬光太って言います。家は結構離れた場所にあります。お姉さんの名前は？」

俺が名前を尋ねると一瞬だが表情が曇った。

ただとすぐに「あらナンパかしら？悪いけど秘密よ」と返してきた。何を考えているのか全く解らない人だ。

「冗談よ。私の事は皆瀬お姉ちゃんと呼んでちょうだい」

「皆瀬？俺と同じ苗字なんですな。皆瀬さん」

「皆瀬さんじゃないわ。皆瀬お姉ちゃんかお姉ちゃんと呼びなさい」
若く見られたいのだろうか？見たところ俺と大して年は変わらない

ようだけど。

「じゃあ皆瀬お姉ちゃん、なんで俺にご飯奢ってくれたりしてくれるんですか？初対面なのに」

俺は疑問をぶつける。

皆瀬さんが答えようとした時おじさんが頼んでいたメニューを持ってきた。

「皆瀬さ、じゃなかった。皆瀬お姉ちゃん本当にそれ1人で食べられるの？」

水瀬さんの注文した巨大餃子は本当に巨大だった。

この餃子は本来5〜6人で食べる物なんじゃないだろうか。テーブルの半分を占領している。

「さあ食べましょう。お腹空いて仕方ないわ」

そう言つて普通に食べ始めた。

ご飯を食べている途中で水瀬さんはさっきした質問に答えてくれた。

「さっきの質問なんだけど私には下に3人兄弟がいるんだけど、その長男があなたと同じ年なのよ」

「だから気になったんですか？」

「ええ、あいつ今行方不明で同じ年のあなたを見たらなんかほっとけなくて」そう答えてくれた皆瀬さん。

聞いちゃいけない事を聞いてしまったようだ。

「御免なさい、知らなかったとは言え悪い事聞いてしまいました」

「ああ、気にしないで。私が勝手に話した事だから、ね？」

逆に気を使わせてしまった。

「水瀬お姉ちゃん、もし良かったらその長男さんの事教えてくれませんか？もしかしたら会った事があるかもしれません」

皆瀬さんはとても喜んでくれた。

それからその行方不明の長男さんの特徴を聞いた。残念だけど俺には覚えがなかった。

それから水瀬さんは俺に長男さんとの思い出話を聞かせてくれた。

「アイツね、よく私に引つ張り回されてたわ。私が外出る時はいつ

つも連れてったのよ。もう可愛くて仕方なかったのね。アイツが寝る前に絵本読んであげたりしてね」

「絵本ですか。」

「最初は聞きたくないって突っ張るんだけど私が勝手に読んでると興味深々でこっちを見てくるのよ。ほんとに可愛かったわ」

長男さんの話をしている水瀬さんの顔を見るととても優しい顔をしていた。

本当に長男さんが可愛いのだと実感できた。

俺達のご飯を食べ終わり店を後にして先ほどのバス停まで来ていた。水瀬さんは巨大餃子を1人で全部食べてもまだ余裕があるようだ。一体どんな生活したらそんなに食べられるようになるのだろうか？俺は胃がモタレ気味なのに。

水瀬さんは鞆からペンとメモ用紙を取り出して何か書いている。

「そーだ光太君、君にこれをあげよう」

そう言ってくれたの電話番号と1万円だった。

「その電話番号は私の携帯の番号よ。何かあったら電話しなさい、すぐに駆けつけてあがるから。後お金はお小遣いね、大事に使いなさい」

「こんな大金貰えませんか」

「私の話を聞いてくれたお礼って事でいいわよ。そのお金で地図とか買いなさい」

そう言うのと通りがかったタクシーを止めた。

「それじゃ私は仕事があるからまたね！」

「皆瀬さんありがとうございます」

「皆瀬さんじゃないって言ったでしょ？」

そう言い残すとタクシーに乗って行ってしまった。

「あっという間だったな」

俺は本屋を探そうとした時、ハンカチが落ちているのを見つけた。

「皆瀬さんの物かな？電話しないと・・・」
俺は本屋を探す前に公衆電話を探す事にした。

その3後編 解決しよう

夜通し歩き続けて次の街に辿り着いた時には日が昇り始めていた。前の街で公衆電話を見つけた事が出来ず、まだ皆瀬さんに落し物をした事を伝えられていない。

本屋で買うつもりだった地図も貰ったお金を使う事にためらい、結局買う事は無かった。

「夜通し歩くなんてやらなきゃよかった」

少しはりきり過ぎたと後悔していた。

皆瀬さんがとても良くしてくれた為、やる気が出ていたせいだろう。

「こんな朝早くに何集まってるんだ？」

アパートの入り口に人がたくさん集まっていた。

「こんな朝早くに何かあったんですか？」

「殺人事件が起きたんだよ。なんか全身を太いロープでグルグル巻きにしたようなアザがあったんだよ」

「犯人捕まったんですか？」

「いいや、警察の様子だと人間技じゃないみたいだよ」

教えてくれた人にお辞儀をしてその場を離れた。

（人間技じゃない）

この言葉に嫌なものを感じた。

この事件は化物の仕業なんじゃないだろうか。

俺の予感が当たっていない事を願いつつも今日はこの街に滞在する事を決めた。

夜になり、俺は行動を開始した。

俺の予感が当たっていたら化物と戦うだろう。

最悪、人間の姿のままで化物と戦う事になるかもしれない。

もしかしたら化物と戦っているうちにまた姿が変わるかもしれない。
俺は行当たりばったりな事を考えながら住宅地を回っていた。

「助けて!!」

女の人の叫び声が聞こえた。

すぐに俺はその声の方向へと走り出した。

現場に行ってみると蛇の姿をした化物が人に襲い掛かろうとしていた。

「させるか!!」

化物の背中に飛び乗る。

「来たのね、皆瀬光太」

化物が俺の名前を呼んだ。

驚いた隙に化物は凄い勢いで俺を振り払おうとしてきた。
必死にしがみつきながら狙われた女性に叫んだ。

「早く逃げてください」

「こ、腰が抜けて動けないの」

今にも泣きそうな声で言う。

この化物の隙を突いてこの人を遠くに運ばなければならぬ。

考えていると遠くからサイレンの音が聞こえてきた。
誰かが警察を呼んだのかもしれない。

「邪魔が入ったわね」

そう言うのと化物は逃げていった。

助かったんだろ？と疑問が残る。

警察にいろいろ事情を話した後、俺は襲われていた人と話に話を聞いた。

「化物に教われるような覚えはありますか？」

「そんなの無いに決まってるじゃない！！」

全くその通りだ。

「あの化物はもう一度あなたを襲うかもしれません。俺にあなたの護衛をさせて貰えませんか？」

「警察が事件解決までそばにいてくれますから大丈夫です」

断られてしまった。

あんまりしつこくして俺が警察に捕まっても困るから素直に諦めるふりをした。

けれど警察がそばにいても化物相手では刃が立たないだろう。

俺は警察の邪魔にならないようにひっそりと付いて行く事にした。

女性が襲われてから三日後の夜、またあの化物が現れた。

警察に守られながら家路へと急いでいた所を狙われたのだ。

突然現れた化物の前で警察は何もする事が出来なかった。

化物の尻尾が警察官を次々とコンクリートの地面に叩きつける。

「今度こそ死んでもらうわよ」

女性に近づく化物に向って俺は体をぶつける。
奇襲は成功し、化物は地面に倒れる。

「今のうちに逃げるんだ」

前回とは違いすぐに女性は走って逃げていった。

「これ以上人は殺させないぞ、蛇の化物」

「これでいいわ」

訳の解らない事を言うと言と化物は走り出した。

逃しはしないと俺も化物を追う。

しばらく走っておかしな事に気が付いた。

この化物は俺がギリギリで付いてこれる速さで走っている。

この前はあまりの速さに追う事ができなかった、化物の目的は何なんだ？

化物は工場の中へと入っていった。

「ここが化物のアジトか？」

工場の中へと入る。

物陰から誰かが出てきた。

「皆瀬さん?!」

「皆瀬お姉ちゃんかお姉ちゃんと呼びなさい」

「そんな事よりこんな所にいるんだよ、ここに化物が逃げ込んだんだ。だから早く逃げてください」

あの化物が今度は皆瀬さんを狙うかもしれない、それだけは避けたかった。

「ねえ、光太君？」

俺を呼ぶ皆瀬さん。

「何ですか？早くここから逃げないと化物が・・・」

「光太君、私と一緒に来て欲しいんだけど」

こんな時に何を言っているんだこの人は？

「どこに行けって言ってますか？」

「あなたを誘拐した組織の所」

世界が歪んだような気がした。

なんでこの人は俺が誘拐された事を知っているんだ？
組織って何だ？

「そんな驚かないでよ。私ねあなたを組織の所に連れて行かないといけないの」

「ちよつと待ってくださいよ、皆瀬さんが何を言ってるか理解できません」

「この姿を見てくれたらすぐ理解できるよ」

皆瀬さんの姿が見る見る変わっていった。

言葉が出ない、だって変わった姿は蛇の化物だったんだから。

「私ね、あなたかあなたの核を組織に渡さないといけないの。私は

あなたを殺したくない、だから一緒に来て欲しいの」

「人間を誘拐して化物にするような奴らの所には行きたくありません」

「どうしても駄目？あなたを殺さないと駄目なのかしら？」

皆瀬さんは俺を殺したくないから、すぐに手を出さないみたいだ。上手く説得すれば戦わなくて済むかもしれない。

「皆瀬さん、戦うのは止めましょう？俺には浩二って言う仲間がいるんです。三人で戦えば悪い組織なんか潰せる筈です」

「一緒に戦う？あなたは本気で組織を潰せると思うの？躊躇いも無く人を誘拐して化物にしてしまう組織を？」

「潰します。そうしなければ生きている人達が大変な事になってしまっから」

「駄目みたいね、あなたはここで死んでちょうだい」

皆瀬さんは尻尾をぶつけてきた。

俺は積み上げられた箱の山まで跳ね飛ばされた。

「悪いわね、あなたの核を組織に渡さないと家族が化物に変えられてしまうのよ、私みたいだね」

「だったら俺が皆瀬さんの家族を守ります。それならいいでしょう？」

箱の山が衝撃を和らげてくれたお陰でなんとか立ち上がる事ができた。

俺は皆瀬さんを戦いたくない、家族が人質になっているのならその家族も助けたい。

そんな思いで体の中が熱くなるのを感じた。

「皆瀬さん、もう一度言います。俺があなたの家族を助けます。だから、もう戦うのは止めましょう!!」

皆瀬さんの方を見て言う。

皆瀬さんの体が震えているように見えた。

「アアアアアアアアアアアア」

聞いた事の無いような声をあげる皆瀬さん。
尻尾を鞭のように使い俺に攻撃を仕掛ける。

「皆瀬さん、攻撃を止めてください」

「私は信じない、絶対に、こんなの嘘よ」

皆瀬さんの攻撃が止んだと思ったのもつかの間、皆瀬さんは俺の体を締め付け始めた。

「俺は戦いたくない、お願いします、止めてください」

「姿を変えたくせに何言ってるのよ。私はあなたを殺す、絶対に」

その言葉で初めて自分の姿が化物に変わった事に気づいた。

このまま締め付けられたら本当に死んでしまう。

脱出する為に攻撃をする。

「攻撃してきてやっぱり私を殺す気なんじゃない、このうそつき!!」

「皆瀬さんが攻撃を止めてくれないからです!!」

今の皆瀬さんは冷静な判断が出来ないほどパニックになっているようだ。

どうすれば正気に戻ってくれるだろうか。

手段を考えようにも皆瀬さんは攻撃を続ける為考えられない。

皆瀬さんの攻撃で体勢が崩れてしまった隙を突いてさらに攻撃を仕掛ける。

「お姉ちゃん止めて!!」

とっさに叫んでいた。

「私・・・」

攻撃の止めて冷静になってくれたみたいだ。

「皆瀬さん、もう止めましょう?」

説得しようとする俺に皆瀬さんは言う。

「お願い、殺して」

そんなお願い聞ける訳が無い。

「これじゃあ私、化物だわ」

「そんな事はありません」

「駄目よ、自分を忘れてあなたを殺そうとした。また同じ事を繰り返しちゃう」

さっきまでの事にショックを受けている皆瀬さんを励まさなければ・・・。

「無能が!!」

どこからか声が聞こえた。

「あなたは・・・」

突然聞こえた声に反応する皆瀬さん。

声の主が何者が知っているようだ。

「あなたは私に嘘をついたわね？」

「・・・私に逆らうと言うのだな？」

「あなたの言いなりにはならない！！」

声の主に対してそう叫ぶ皆瀬さん。

「ならばしかたない、廃棄処分だ」

声が聞こえなくなると皆瀬さんが苦しみ始めた。

「皆瀬さんどうしたんですか？」

「光太君聞いて、私もすぐ爆発してしまう」

「爆発って・・・」

「爆発したらこの街が一気に焼け野原になってしまうほどの威力よ」

「そんな、どうしたら」

「私の核を壊して、そうすれば爆破プログラムは止まるから」

「でもそんな事したら皆瀬さんが死んじゃいます」

俺は皆瀬さんを死なせたくない。

行方不明の長男さんにも会っていないのに。

「お願い、これ以上私に人殺しをさせないで、ね？」

そんな事を言われては何も言えない。

「そうだ最後にもう一度お姉ちゃんって言うてくれない？」

皆瀬さんの最後の頼みだ、断る事なんて出来ない。

「お姉ちゃんご免」

俺は皆瀬さんの核を砕いた。

「皆をお願い・・・」

皆瀬さんはさっきまでとても苦しんでいたのにその言葉を笑顔で言
って消えて逝った。

化物の起こした事件は解決した。

俺は狙われていた女性にその事を告げてまた次の街に行くことにし
た。

悲しい事のあった街に長居しなくなかったというのが正直なところ
だ。

皆瀬さんを死なせてしまった後、俺は記憶の一部が戻っている事に
気づいた。

顔は判らないけれど優しくて頼りになる人の記憶だった。

思い出した記憶のせいかやたらと皆瀬さんの事を思い出してしまう。
もし違う所で皆瀬さんと会っていたのなら俺は皆瀬さんを姉として
慕っていたかもしれない。

そんな思いが消えてくれない・・・。

その4 前編 化物逃げる、化物追う

思い出したのは優しくて頼りになる人の記憶。

記憶の中の人物が俺とどんな関係だったのかはまったく解らない。

このまま旅を続けていれば思い出すのだろうか？

次に到着した町で道が間違っていないか確認するために本屋に立ち寄った。

俺は着実に家へと近づいている事を確認すると本屋を後にした。

本屋の周りには飲食店が立ち並び、美味しい匂いで人を誘おうとしている。

その匂いに刺激され俺の腹の虫が鳴いた。

「夜までは我慢だ…」

この町に来る前に同じ様に匂いを嗅いで腹の虫が鳴き出した。

時間帯はお昼頃だったと思う。

美味しい匂いの中にいた俺は欲求を抑えられなくなり、ごみを漁った。

ごみの中から食べられる部分を見つけ食べる。

それを腹が満腹になるまで繰り返し続けた。

腹が満たされ我に返ると俺の周りに人だかりが出来ていた。

あの時に感じた視線は痛かった。

俺に突き刺さった視線は刺した所からゴリゴリと傷口を広げるようだった。

それ以来どんなに欲に支配されようと人目に付かない夜までは我慢しようと心に誓った。

恥しい事を思い出していると後ろからヴォーッという音が聞こえてきた。

その音は段々近づいてくる。

ヴオーツ、ヴォツヴォツヴォツ

その音は俺を追い越して行った。

カバみたいな後ろ姿だった。

「カバの被り物なんてあるんだな」

そう思うとまた後ろの方からガオオオオとライオンみたいな鳴き声が聞こえる。

なんでこんな所で？と思っているとすごい速さで何かが俺を追い抜いた。

その後姿はライオンのようだった。

最近の被り物はリアルなんだな・・・と感心していると後ろで子供が言った。

「カバさんとライオンさんがおいかけっこしてるー」

子供の言ったその言葉でさっきの奴らは本物だと思った。

一瞬の出来事だったがふと思い出すと被り物と肌との境目が無かった。

「また化物か!!」

空腹だった事を忘れ俺は二体を追いかけた。

二体を見つけて様子を見る。

「裏切り者は始末する」

「うらは人殺しなんかしたかねえ、見逃してけれ」

じりじりとライオン姿の化物がカバ姿の化物に近づく。

「仲間割れしてるのか？」

もう少し様子を見てみる。

「うらは人として生きるんだ、ドメスにはあにもしねえ。だから、な？」

「役に立たない者は廃棄処分と決まっているのを忘れていいのか」

「そこをなんとか見逃してけれ」

カバ姿の化物は脱走しようとしてライオン姿の化物に追われていた

らしい。

「あのカバを助ければ化物の事が解るかもしれないな」

俺は後先考えずにカバ姿の化物を助ける事にした。

全力でライオン姿の化物へと走り、背中に蹴りを入れる。

「甘い！」

俺のケリはあっさりと避けられた。

「お前は何者だ？」

ライオン姿の化物が問いかける。

「お前を倒す者だ」

そう言つてライオン姿の化物に殴りかかる。

そういえば人の姿のはずなのにやけに体がスムーズに動く。

ライオン姿の化物は俺の攻撃範囲から離れ「くそ、報告しなければ」
と言つて去つていった。

「大丈夫か？カバ」

俺がそう声をかけて振り向くとカバは震えていた。

「安心しろ、俺はあんたを倒しに来たんじゃない」

けれどカバの震えはいっこう治まらない。

「しっかりしろよ」

カバの肩に触ろうとすると凄い力で手を弾かれた。

「たすけてええ」

と言つとヴォーッと音を出しながら走り去ってしまった。

「ちよつとま……」

言い終わる前にカバの姿は見えなくなった。

俺は伸ばした手を戻す事も忘れていた。

「なんだよ、あのカバ」

そして手を伸ばしっぱなしだった事に気づいた。

「あれ？いつの間にか姿が変わつてる」

よく判らないうちに姿が変わっていた事に気がついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5030f/>

自宅に帰ろう

2010年10月9日18時27分発行